

帰って来た__対人援助学縦横無尽(1)

コロナ後の文化心理学ネットワーク、再始動

立命館大学総合心理学部 サトウタツヤ

前口上

日本では2023年5月に新型コロナウイルス感染症の扱いが変わり、コロナ後に移行した。2020年3月にはブラジル行きを予定したにもかかわらず、実現することができなかった。本稿では2023年度に私が経験した文化心理学海外ネットワークとの交流について簡単に記して起きたい。まず、8月にはオールボー大学の Mogens Jensen 名誉准教授が立命館大学人間科学研究科の客員教授として滞在し1週間の集中講義を行った。ついで、9月には筆者が立命館大学総合心理学部海外フィールドワークの引率をしてデンマーク・オールボー大学とコペンハーゲン大学などを訪問した。そして、ブリガムヤング大学の Zachery Beckstead 准教授が9月末から始まる秋学期の約3ヶ月間、立命館大学客員准教授として家族と共に滞在して英語で授業を行った。11月には被災地福島への小旅行・講演も行った。あくる2024年1月ザックは帰国した。そして2月、筆者はシンガポール国立大学・ウォーカー泉准教授に招待されてTEA(複線径路等至性アプローチ)に関する講演を行ってきた。以上、筆者にとって2023年度は文化心理学を中心にした海外交流が再開した年だったと言える。こうした記録を残しておくのはやはり『対人援助学マガジン』だと思い、卒業した身ではあるが、急遽、原稿を準備することにした。

目次

- 1 2023年8月 モーンズ in 立命館大学
- 2 2023年9月 海外フィールドスタディ in デンマーク
- 3 2023年9~2024年1月 ザック in 立命館大学
- 4 2023年11月 ザック in 福島
- 5 2024年2月 サトタツ in シンガポール国立大学

1 モーンズ in 立命館大学

オールボー大学の Mogens Jensen 名誉准教授のニックネームはモーンズである。Mogens をローマ字読みするとモーゲンだが、デンマーク語では単語の間の母音に挟まれた子音を発音しないそうなので、モーンズとなる。モーンズには、立命館大学総合心理学部の海外フィールドスタディを受け入れること、その前提としてオールボー大学心理・コミュニケーション学部と立命館大学総合心理学部の相互協力覚え書き締結に非常に尽力してもらった経緯がある。大学院で集中講義をしてくれないかと依頼したところ快く引き受けてもらった。

ちなみにオールボー大学は、PBLを実践する大学として1974年に創設され、世界トップレベルの大学である(世界ランキング201-250位)。オールボー大学のPBLは、オールボーモデルと呼ばれており全学部で実行されている。なお、デンマークの大学の学費は全て無料であるが、間接税が高いことでも知られている。

モーンズの授業は文化論的心理学に基づくものであった。授業の様子、授業の一環として行われたエクスカッションについての写真を掲載しておく。



また、ハイブリッド形式で、文化心理学セミナーも行った。この会ではモーンズと共著論文を執筆した経験がある神崎真実（RGIRO 助教；サトゼミ 8 期生）が研究発表を行った。

文化心理学セミナー 9/01 14:40～

企画・司会 サトウタツヤ（立命館大学）

共催：立命館大学ものづくり質的研究センター／立命館大学人間科学研究科

1 On Personal Umwelt; Cultural psychology, personality and agency.

Mogens Jensen (Associate professor emeritus; Aalborg University, Denmark)

2 不登校の文脈理解: "Common perspective" を拓く

神崎真実（立命館大学 RGIRO 研究助教）

3 全体討論

4 終了後；フェアウェルパーティー



Cultural psychology, personal umwelt and agency. 文化心理学、個人的環世界、そしてエージェンシー



Mogens Jensen, associate professor emeritus
Aalborg University, Denmark
Visiting professor, Ritsumeikan University
mogensj@ikp.aau.dk



心理学において環境主義を標榜すると、人間の主体性を損なうのではないかという疑念が寄せられることがある。モーンズの個人的環世界という考えはそうした危惧を払拭する魅力的な考え方である。

2 海外フィールドスタディ in デンマーク

オールボー大学と筆者の関係は、Jaan Valsiner がクラーク大学からデンマークに異動した 2013 年に遡り、その後の様々な経緯を経て学部生を定期的にオールボー大学に連れて行けるようになったのが 2019 年度のことであった。2020 年 3 月に第一回目の海外フィールドスタディを行ったが、まさにパンデミック前夜でありまさか

の大学閉鎖で1日早く帰国したのであった。その後、2年間の代替オンラインセミナーを経て2022年度には直接訪問が再開された。2022年度も押し詰まる2023年3月に再開第一回目（通算二回目）が行われ、2023年度からは9月に行うことになった。

表 2023年度海外フィールドスタディ（デンマーク）日程表

9/11（月）	オールボー大学	文化心理学セミナー講義
9/12（火）	オールボー大学	文化心理学講義、街アート見学、コンピテンシー講義
9/13（水）	コペンハーゲン	に移動。国民学校訪問
9/14（木）	コペンハーゲン大学	講義参加 エクスカーション（人魚姫）

以下、それぞれの日の活動報告である。

9/11（月） オールボー大学

10：15～昼食をはさんで、14時ころまでが、文献購読文化心理学セミナー（AAU 学生7名）
昼食は大学で（外だと物価が高い、という理由もある）。



14時半くらいから16時半ころまで、ブレイディこと Brady Wagoner 教授による文化心理学の講義（社会的表象）に参加。

9/12（火）

午前中は、ご存じモーンズ先生の個人的環世界の講義に参加。その後、サラ先生こと Sarah Awad 准教授のアート系の講義に参加した。午後から見学するウォールアートについての解説もあった（はず）。



午後はオールボーの街歩き。サラの案内で街中の様々なアートを体験する。Sense of Wonder (オドロキの感覚) をもたらずのがウォールアート。



午後は丘の上にあるメインキャンパスへ

Thomas Ryberg 教授と Jesper Vestergaard 教授にヤスパー先生の講義内容はアントレプレナー・コンピテンスでした。講義もさることながらブレイク用に用意してくれたお菓子和飲み物が豪華でした。



9/13 (水)

オールボーからコペンハーゲンに移動。そして、デンマーク北端にある国際国民学校 (International Peoples College) を訪問。ここは、TA を務めてくれている D3 の高史行氏の出身校ということもあり、校長先生以下みなさん大歓迎してくれた。以下の2枚の写真を含め、高氏のカメラに収められた写真も多い。



9/14 (木)

コペンハーゲン大学の講義に参加。コペンハーゲンの心理学と言ってもピンとこない人が多いかもしれないが、多義図形（横顔か盃か）で有名なルビンはデンマークの心理学者である。ブレイディが行う講義に参加させてもらった。学生の様子をチラ見していると、前の席は熱心に聞いている学生が多い一方で後ろの席はスマホを見ている学生も多く、学生文化は普遍的なんだろうなあと思ったりもした。ただ、日本の教室で見られない光景としては、サラダを食べながら受講する女子学生がいたことである。私自身は講義で食事をするのは賛成であり、微笑ましく思えた。



ブレイディは 2023 年からコペンハーゲン大学で授業を持つようになり、この日はその第一回目、ということで自己紹介もふんだんに盛り込まれていた。筆者が彼に最初に会ったのは 2008 年の第 5 回国際対話自己学会 @イギリス・ケンブリッジ大学で、彼は大学院生として受付係をやっていた。立派に成長したもんだ、と感慨にふけったりして。

3 ザック in 立命館大学

1-1 客員准教授ザックの授業

今回、ザックは妻と子ども 3 人の 5 人での滞日であった。2024 年 9 月に来日し、家族でディズニーランドなど観光を楽しんだあと、彼が初めて OIC に来たのは 10 月 2 日。客員教授として教員研究室も与えられていた

が、机一つで少し寂しかった。



初回授業には総合心理学部の学生のほか、経営学部の SIK(Study in Kansai)の学生 4 名も参加した。



授業は毎週月曜の午後 1 時から。初回授業の自己紹介パートでは、懐かしい写真も提示された。ザックは 2009 年に大学院生として立命館大学の筆者のもとに滞在したのであった。当時はクラーク大学の大学院生で、Jaan Valsiner 教授（愛称ヤーン）のもとで巡礼に関する研究を行うために日本に来ていたのであった。写真はおそらく 5 期生の蓮井さん（旧姓）の実家が経営している焼き肉店だそうである（記憶曖昧）。

また、総合心理学部では、月水金の昼休みに「英語で話そう」というイベントを行っているのであるが、ザックは時間があるときにそこに参加してくれた。



歓迎会やあつという間の送別会なども何度か行われていた（ただし、ザックは宗教上の理由からアルコールを嗜まないのので常にコーラを飲んでいたのであった）。



2 ザック in Fukushima

ザックの研究は巡礼や集合的記憶である。そうしたテーマには第二次世界大戦の記憶や福島原発事故（の後の避難）が含まれる。そこで、福島ツアーを企画した。震災復興に関する卒論を書いている学部生／修論生などを含め総勢8名で福島訪問を行った。ゼミ生を連れて行く企画はコロナ後初めてである。

日程は2024年11月21～23日の二泊三日。福島県喜多方市の会津地域、福島市の中通り地域、そして浪江焼きそばで有名な浪江町など浜通り地域、福島全域をまたぐツアーとなった。以下、時間順に

11月21日

- 06:51 新大阪発 のぞみ206号
 - 09:40 東京発 やまびこ55号
 - 11:15 郡山発 会津若松行 普通列車
 - 12:30 会津若松からレンタカーで喜多方へ
- 昼食は、もちろん喜多方ラーメン。



木之本漆器（私の母の実家）訪問

母方の実家を訪れた理由は、母の兄（伯父）がサイパン島で戦死しており、仏壇にその方の写真が飾られているからである。筆者自身、伯父の写真は「おばあちゃんち」に行く度に良く見ており、個人の家で戦死者をどのように悼んでいるのかをザックに見せる目的で彼を連れていった。海外からきた研究者が個人の家のお仏壇を見ることは簡単ではないが、筆者の母の実家なのでイトコで当主の遠藤久美氏に頼んで実現することができた。



ちなみに木之本漆器店の祖先是滋賀県の木之本から会津に来たそうである。いまでは漆器や桐のグッズの店として知られている。



<https://www.aizu-kinomoto.com/>

夕刻 一般財団法人 福島民報教育福祉事業団

喜多方市から福島市に車で移動し、一般財団法人・福島民報教育福祉事業団で震災復興のために寄付。サトゼミでは、福島に来るたびに、少額ではあるが、寄付をさせてもらっている。後日、新聞記事に掲載してくれるのも大変ありがたい（エビデンスという意味でも）。

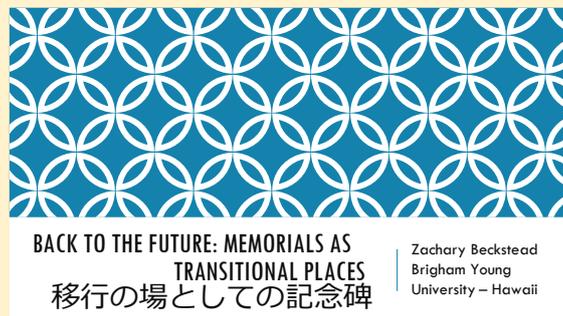


18：30 頃

福島県立医科大学（駅前キャンパス）で研究会

Fifth Meeting of the Longitudinal Study on Evacuees from the Fukushima Nuclear Power Plant Accident

夜は、福島県立医科大学講師の日高友郎（サトゼミ3期生）による研究会が行われた。日高、ザックの二人が研究発表を行った。この二人は、ザックが2009年に立命館大学に滞在したときにお互い大学院生同士だったという旧知の仲であり、それぞれが研究者として成長した姿を見せ合ったという意味でも意義深いものであった。福島大学の研究者たちも参加してくれて大いに賑わった。



この時のザックのテーマは移行であった。

彼は、移行について探求すべき問いとして、

記念碑はどのように想起の助けとなるのか？ 記念碑は、トラウマ的出来事の集団的・個人的想起にどのように役立つのか？ 記念碑はトラウマの癒しに役立つか？

の3つをあげていた。そして、これらの問いを探究するために「Liminality」が重要だと主張していた。

Liminalityとは耳慣れなかったが、リミナリティとカタカナ書きされたり、境界性と訳されたりする文化人類学の専門用語である。Liminalityはラテン語の「Limus」に由来し、闕や敷居という意味をもつ。敷居とは、家の内と外をわける領域のことである。俗に「敷居が高い」と言えば、何か新しいことをやったり、人に会って何かを頼むのが困難だ、という意味をもつ。移行が難しいということなのであろう。

なぜか筆者はこの概念の沼にどっぷりとはまってしまい、様々な文献を読みあさり、ついには Liminality=移境態という訳を提唱することになった。そして『TEA用語辞典(仮)』で移境態を担当することにして、「移境態

は時間・空間における何かと何かの間の境にある（いる）という状態を指す。ある場所から他の場所へ、キレイなものがキタナイものになる（また、その逆）など可逆的な移行・移動、人生における発達段階（思春期から青年期）のように非可逆的な移行・移動、の中間状態が移境態である」と定義することになった。

ちなみにザックは、「Liminality is one of the few universal principles key a culturally inclusive psychology and an aspect of our everyday life. = 移境態は文化的にインクルーシブな心理学における数少ない普遍原則の一つであり、私たちの日常生活の一側面です。」と述べていた。

研究会の後は、会津郷土料理「楽」で夕食・宴となった。この店は、会津風の馬刺しを食べさせてくれる。

<https://www.rakunitanoshiku.com/>



22日

朝 飯坂温泉 公衆温泉 鯖湖湯

公衆の温泉、というのも日本文化だよ、ということで訪問。



正午

12:30 檜葉町 一般財団法人ならはみらい

ならはみらいには立命館大学の校友が多数関与しており、今回も校友でならはみらい勤務の森雄一朗氏のお世話になった。また、立命館大学福島県校友会に属する馬場幸蔵氏と三村智春氏の体験談を聞かせてもらった。馬場氏は郡山から、三村氏はいわき市から、それぞれ手弁当で駆けつけてくれてザックや学生達に当時の話を聞かせてくれたのである。

「震災二ヶ月後、立命館大学の校友会が、福島にきた。

しかし、福島の人々は展望がなく、何を支援して欲しいか言うのが難しかった。」

その後も、立命館大学の職員が福島県の校友会を訪ねてくれた。しかし、卒業生の状況もわからなかったのも、何も頼めなかった。

そこで、福島の立命館大学卒業生を、立命館大学の全国校友会に招待してくれと頼んだ。そこで、多くの他の卒業生に 2011 年の状況を伝えることができた。全国の卒業生が福島を支援してくれてうれしかった。また、他の県の卒業生が、東北地方を回るツアーをしてくれた。とにかく現場を見ようという校友の気持ちがうれしかった。」

馬場・三村氏は、立命館大学は全国型大学で、全国の卒業生がその時から切れ目無く支援したり来てくれたりしたのでありがたいということを深い感慨と共に述べていた。



昼食 道の駅 ならば

昼食後は富岡町の東京電力廃炉資料館を訪問した。予約制であり、東京電力の皆さんの視線からみた原発事故やそれへの対応が記念館になっている。

富岡町 東京電力廃炉資料館



大熊町役場

夕方、復興知事業で旧知の職員のいる大熊町役場を訪問し、役場内を見学させてもらった。大熊町はそのホームページを見る限り、2024年2月現在においてもなお、人口のほぼ全てが町の外に避難している状況である。地震・津波の被害も大きかったが、原子力災害の被害は持続性という意味で他の災害とは異なる影響を与え続けている。

[大熊町民の被害・避難状況 - 大熊町公式ホームページ \(town.okuma.fukushima.jp\)](http://town.okuma.fukushima.jp)



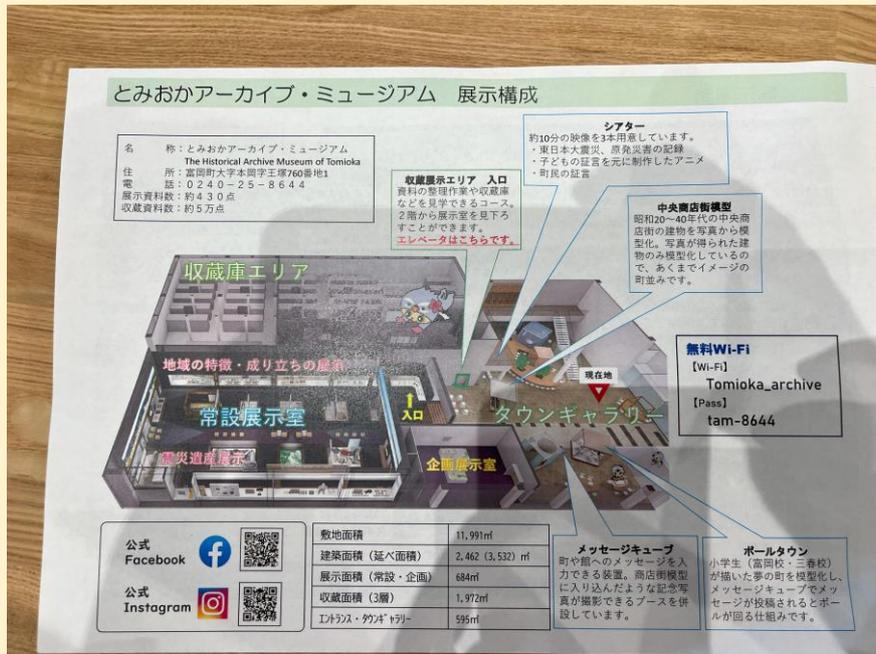
大熊インキュベーションセンター (OIC) <https://okuma-ic.jp/>

この施設は、小学校だった建物の再利用。

23日 朝

富岡アーカイブ・ミュージアム

このミュージアムは、住民目線からの震災・原発事故が語られている。



双葉町のウォールアート

その後、双葉町役場横山氏と落ち合って、双葉町のウォールアートを見て回った。2023年度のサトゼミ卒論生（20期生）が双葉町をフィールドにしているのだが、その情報源の一人が横山氏である。まず、ウォールアートを解説付きで歩いて見て回ることができた。贅沢である。



だが、それ以上に胸をうったのは横山氏の自宅の様子である。震災後12年たっても、自宅がこの有様なのである。地震+原子力災害によって帰還できなかったことのすごさを見せつけられたと言える。横山氏はテレビ取材などにも応じて自宅の状況を発信してきたというが、このような自宅を人に見せている横山氏の心中はいかばかりだったかと思う。



東日本大震災・原子力災害伝承館

そして、双葉町にある東日本大震災・原子力災害伝承館である。黒い袋はフレキシブルコンテナバック、略してフレコンである。福島県内では、除染によって生じた廃棄物をこのフレコンに詰め、仮置き場に保管している。仮であるから、やがて他の場所に移すのだが、まずは中間貯蔵施設に蓄え、最終的に最終処分の場所に移すことになるのだが—容易に想像がつくように—こうした処分の場所を決めるのは容易ではない。このフレコン、車中移動をしていると至る所で目にするのだが、その大きさについてはあまり実感することができなかった。今回、フレコンの実物が展示されていたので、ザックをモデルにして人間との大きさの対比を実感できるようにしてみた。



昼食

最終日の昼食は「道の駅なみえ」フードテラスかなで。

<https://fukushima-jobanmono.jp/enjoy/eat/restaurant1256/>

浪江と言えば浪江やきそば。



昼食後は 浪江震災遺構＝浪江町立請戸小学校に向かう。

<https://namie-ukedo.com/>

<https://fukushima.travel/destination/the-remains-of-ukedo-elementary-school-in-namie-town/351>

公式サイトによれば、「倒壊を免れた校舎に刻まれた脅威と、全員避難することができた経験を伝えるため、2021年より震災遺構として一般公開いたしました」とのことである。

筆者は浪江町立請戸小学校には、震災遺構として整備される前に何度か訪問してきた。文字通り時間が止まったままになっている時計、翌日の3/12が卒業式だったこともありその準備状況のままになっていた体育館など、震災の傷跡をリアルに伝えてくれていたのである。震災遺構として整備されることで、こうした状況を永く保存出来るというのは素晴らしいことである。



その後、最終目的地である、大平山の慰霊碑訪問を行った。



ザックからの直後のメール

Dear Tatsuya,

I am very happy to hear from you are on your way back.

I will give Tatsuya's Travel Agency (TTA) a five out of five star rating. You may be getting inquiries about your services soon.

I was incredibly impressed with your students. I was worried I would make them feel uncomfortable because of the language barriers, but they were so kind and willing to help interpret and tell me about Fukushima. I really enjoyed getting to know them.

It was a pleasure and I am excited for new ideas about research. I couldn't help but think about how this relates to my life and community at home. I would love to bring my students to Fukushima for them to learn more.

Thanks again for everything and have a great weekend!

Best,

以上が、ザック+サトゼミ福島訪問記である。

5 シンガポール国立大学訪問

忙中閑あり、というわけではないが、2024年2月のカレンダーを見ていたら、数日間、出張できるということに気がついた(2024年1月中旬)。そこで、かねてよりお招きのあったシンガポール国立大学を訪問することにした。

かつて立命館大学にサバティカルで在籍したウォーカー泉先生が、2023年5月にシンガポール日本語教師の会の会合に誘ってくれていたのであるが、事情で現地参加ができずオンライン参加(ZOOMによる講演)をせざるを得なかった。その代替となる訪問をしたいと思っていた、という事情が背景にあった。

シンガポール国立大学において、外国人ゲストを呼ぶためには1ヶ月間の余裕が必要だということは私は全く知らなかったの、気楽に訪問の意図を伝えてしまった。ウォーカー泉先生ほかの皆さんは大変喜んでくれたのであるが、実は事務的には色々と問題を引き起こしかねなかったのであった。

2024年2月6日、この日は移動日であるが、映像学部の北野圭介先生がサバティカルでシンガポール在住と

いうことを知っていたので、声をかけてご夫婦と小籠包を堪能した。お嬢さんもいたのであるが、写真を撮ってくれたので写っていない。



翌2月7日、打ち合わせをかねて大学内の高級レストランで食事会。北京ダックを食べさせていただく。



シンガポールは四季の区別がほとんどなく、2月でも30度程度の気温であった（それでも、2月は1年のうちで1番涼しい時期だという）。

講演のタイトルは「TEA（複線径路等至性アプローチ）と日本語教育の邂逅」であった。ウォーカー泉先生はTEAと質的探究学会に論文を発表している。その紹介も行った。<https://jatq.jp/journal.html>



まとめにかえて

以上、2023 年度における文化心理学の仲間達との交流を振り返ってみた。私が TEA（複線径路等至性アプローチ）を開発する途上で出会った人たちが今では大学の教員になって立命館大学の学生たちと交流してくれているということに、大きな喜びを感じている。

参考にこれまで対人援助学マガジンで紡いできた文化心理学的交流について振り返っておく。

参考 対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル <http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス <http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、8 月オランダ、デンマーク

<http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf>

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf>

Jaan Valsiner 先生、2018 年 5 月の滞在記

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf>

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(1) 2008 年まで

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/15.pdf>

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(2) 2009 年から